

研究ノート

## 北条時政考——源頼朝、北条義時・政子との関係を中心に——

大嶽 真康 (教育学科)

## 要旨

本研究は、近年の諸研究の成果に基づき、従来北条時政の事績とされてきたものを精査し、真の時政像に迫ろうという意図を持つものである。その為に、本論考では鎌倉政権初期における北条氏の動向を一元的に見るのではなく時政とその子義時・政子の行動を分けて考えることを試みてみた。本稿は頼朝の没直後で考察を終えたが、今後さらに時代を下って考察を進めていきたい。

キーワード 鎌倉幕府 北条時政 源頼朝 北条義時 北条政子

## はじめに

鎌倉幕府の成立に貢献した重要な人物を挙げるとすれば、その上位に北条時政が入ることであろう。言うまでもなく源頼朝の舅であり、初代執権と位置付けられる人物である。

時政という人物は、一般的に次のように理解されている。平治の乱後に捕えられて、永暦元(一一六〇)年伊豆流罪となった源頼朝に娘政子を嫁がせ、舅として頼朝を陰に陽に助け支えた。治承四(一一八〇)年の挙兵以降は頼朝の側近くにあつてその信頼を勝ち得、鎌倉幕府の確立に大いに貢献した。建久十(一一九九)年に頼朝が死去するとしだいに野心を露わにし、有力御家人の比企能員を退けて二代將軍頼家を廃し、その弟実朝を擁立して幕府の実権を握る。さらに武蔵国の有力者畠山重

忠を滅ぼし政権内最高実力者となったが、後妻牧の方と共謀して將軍実朝の廃立を企てたため、子である北条義時や政子によって出家を余儀なくされ伊豆に退き亡くなった。

しかし、時政時代の幕府政治については、一九八〇年代以降さまざまな視点から研究が進んでおり、旧来の研究成果の整理と併せて〈野口二〇〇七〉、新たな時政像が構築されてもよい時期に来ている。筆者は、時政と源頼朝の関係を、冷淡を基調とした危うい協力関係と位置付け、時政と義時・政子の関係は、外見上の共同歩調に隠された反感・緊張関係と考えている。鎌倉幕府初期の源氏將軍と北条氏の関係は、例えば頼朝と時政という二元論ではなく、頼朝、時政と義時・政子という三元論で捉えるべきである。筆者は元久二(一二〇五)年の時政失脚の遙か以前から時政と義時・政子の間に距離があると見ており、時政主導とされる有力御家人滅亡事件のいくつかには再考の余地があると考えている。今回は、こうした考察の前提となる頼朝と時政の関係、時政と義時・政子の関係について考察してみたい。

## 一 北条時政の出自

まず、簡単に北条時政の出自や家系について触れたい。

『吾妻鏡』(以下『鏡』とする。原漢文。)治承四(一一八〇)年四月二十七日条には「上総介平直方朝臣五代の孫、北條四郎時政主は當國の豪傑なり」とある。頼朝の舅となった時点での時政の実態を、『鏡』の

一文が明確にしている。三浦大介義明や上総介広常のように、在庁官人筆頭たる「介」を名乗ることもできず、「北条四郎」とのみ記される時政は無位無官の地方武士であった。

北条時政の祖は平直方とされるが、直方から時政に至る系譜は諸系図によってかなりの異同がある。この点は多くの先行研究があるが、大括りに総括すると以下になる。

(一) 平直方から時政に至る系譜に血統上の継続性を認める立場

① 直方―維方―盛方と、直方三代目にあたる盛方の時にその系譜は途切れ『統群書類従』巻140「北條系図」に「依違勅被誅」とある、

直方の子熱海禪師聖範の系統が入る。聖範の子が時政の祖父にあたる「時方」である。〈奥富一九八三、菊池一九九八〉

② 時政は北条宗家ではなく庶流である。北条宗家は時政の叔父にあたる時兼であり、その子時定であった。〈杉橋一九八七〉

(二) 平直方から時政に至る血脈について懐疑的である立場

① 時政の祖父である「時家」は伊勢平氏の出身で、伊豆に養子に入つた〈野口二〇〇六〉

② 時政の父「時方」と叔父時兼は同一人物である。『鏡』で時政の甥として登場する時定は時政の弟である。〈野口二〇一一〉

直方から聖範系への断絶を示す傍証もないことから筆者は(一)の立場をとるが、北条時政が平直方の子孫であるという話は、それが『鏡』による一つの主張となっている。

平直方の女婿が源頼義であり外孫が源義家であるという「歴史」と、北条時政の女婿が源頼朝であり外孫が源頼家であるという「現実」の相似性を示すことで、『鏡』は源頼義における平直方の立場に時政をなぞらえたのである。

## 二 歴史への登場

時政自身の系譜をたどってみよう。時政は保延四(一一三八)年の

生まれとされる。『鏡』の死亡記事に記載された年齢からの計算である。時政に関する記録は頼朝挙兵以前にはほとんどないのだが、皆無ではない。甘露寺隆長が兄である吉田定房の訓話や日記を筆録・抄出したものである『吉口伝』『元弘二四三被相語条々』に次のような話がある。かつて吉田経房が伊豆を知行していたとき、在庁官人北条時政に「奇怪事」があつて、時政は国司に「召籠」められた、その時の経房の「行迹」に時政は「甘心」した、後年この話を時政が源頼朝に語って聞かせたので頼朝は経房を信頼するようになった、という。この記事によって、時政が伊豆の在庁官人であったこと、後年時政が上洛した際に朝廷側で窓口となった吉田経房と時政には以前から人脈があったこと等がわかる(森幸夫一九九〇)。吉田経房の伊豆守在任は仁平元(一一五一)年七月から保元三(一一五八)年十一月まで、時政十七歳から二十一歳の時期となる。

時政の元服はこの事件以前であろう。烏帽子親は源義朝の乳母子として有名な鎌田正清の父通清と、「山内首藤系図」(『統群書類従』巻一四九)にある。時政の元服年齢は不明だが、仮に孫の泰時に倣って十三歳とすると一一五一年になる。政子出生が一一五七年であり、元服してまもなく結婚し、政子が生まれたとみられる。

ところが、北条時政の室として明確なのは後年連れ添った牧の方だけである。牧の方との間に嫡男政範と二人の娘(平賀朝雅室で後に源中納言国通の室、三条中納言実宣の室)、などがいた。一方で、政子や宗時、義時、時房らについてその母親は明確でない。手がかりとしては、義時の母が前田育徳会所蔵「平氏系図」において伊東入道(祐親)の女と記載されていること(菊池一九九八)、真名本『曾我物語』巻五に、鎌倉殿御台所の母は曾我兄弟にとって父方の伯母にあたる、とあるので政子の母も伊東祐親の娘の可能性があることのみである。時政の子のうち残る宗時、時房、阿波局(阿野全成室)らの母は明確ではなく、すべてが同一の母親であるという確証もない。

唯一明確な妻、牧の方は駿河大岡の牧の出身である。その実家は単なる在地豪族ではないという。牧の方の父である大岡宗親（愚管抄では父子、『鏡』では兄弟）は、『尊卑分脈』で関白道隆から六代目とされる従四位上宗兼の子、「諸陵助宗親」と同一人物であり、平忠盛の室であった宗子（池禅尼）と兄弟にあたるという（杉橋一九九四）。これには反論もあるが、もし時政の妻牧の方の実家がこのように池家平氏を始めとする貴族層と繋がっていたとしたら、時政の情報収集力は東国御家人武士とはかなり違ったものであったと推測される。伊豆韮山の守山にある北条邸跡の発掘によれば、館を構えたのは十二世紀半ばという（池谷二〇一〇）。狩野川に面し、駿河を経て都への交通に繋がる要衝に本拠を置いた時期は、時政と牧の方の結婚前後であり時政家督継承期と考えてよいであろう。

### 三 源頼朝と時政

北条時政と源頼朝の関係が冷たかったという指摘は、先行研究のなかで珍しくない（野口二〇一二）。例えば坂井孝一は、頼朝在世中時政が頼朝の処遇に不満を抱いていた可能性を述べ（坂井二〇〇〇）、永井晋は頼朝が時政を信頼せず軽視したと考える（永井二〇〇〇）。以下、史料を読み解き両者の関係を考察してみたい。

まず、石橋山敗戦後の頼朝と時政の動向である。治承四（一一八〇）年八月石橋山合戦に敗れた頼朝主従は一時散り散りになる。ふたたび頼朝のもとに集まった武士たちに対して土肥実平は、たくさんの武士がいると目立つので、散り散りになって逃げるべきだといひ、皆もそれに従う。北条父子は、嫡子宗時と時政・義時が二手に分かれる。宗時は伊豆へ戻る途中で殺害される。一時甲斐に向かった時政は考え直して頼朝のもとに戻り八月二十七日頼朝に先行して真鶴から安房に向けて舟を出す。翌日頼朝が真鶴の岩海岸から船を出した。九月八日改めて時政は安房から甲斐へ派遣される。甲斐源氏との合流を目指す頼朝の命だという。こ

のころ甲斐源氏の武田信義、一條忠頼らは、信濃の敵を打ち破り、九月十五日に甲斐に戻って逸見山に宿営していた。そこへ時政が到着して頼朝の言葉を伝えた。続く九月二十日、土屋三郎宗遠は頼朝の使者として甲斐に向かった。土屋には時政と合流して黄瀬川で甲斐源氏とともに防衛線を張るよう頼朝の指示があったとされている。これらは『鏡』による。

しかし、『延慶本平家物語』〈平家物語読本系最古のもので古態を伝えらるゝとされる〉には注目すべき内容がある。「サテ北条四郎時政ハ甲斐国へ趣、一條、武田、小笠原、安田、坂垣、曾禰禪師、那古藏人、此人々ニ告ケルヲバ、兵衛佐ハ知り給ハデ、『此事ヲ甲斐ノ人々ニ知セバヤ』トテ、『示遠行』トテ、御文書ヲ遣シケリ。」すなわち頼朝は北条時政の甲斐での働きを知らなかったから、土屋宗遠を派遣したとある。この後、甲斐源氏は頼朝軍と協力して「富士川の合戦」に臨むのであるが、一連の時政親子の動きは、頼朝との関係で見ると大変きこえない。『鏡』のとおり頼朝の命令で動いたというより、時政独自の判断と行動であったとする『平家物語』の方が自然である。すなわち挙兵後相模から房総に至って現地武士多数の参向を得た頼朝にとって時政の「価値」は低下していた。そこで時政は、独自の駿河・甲斐での人脈を活用して活躍実績をつくろうとした。それが甲斐源氏との合流交渉であったのではないか。

治承四年の頼朝挙兵から建久十年の頼朝死去まで十九年間、北条時政が鎌倉政権の重要な事件に関与したのは一件だけである。それは、文治元（一一八五）年から翌文治二年にかけて、頼朝の名代として上洛したことである。この時、時政は後白河院に対して源義経と行家要請による頼朝追討の院宣発給の責任を追及することにより、畿内から西の諸国において荘園公領かを問わず反別五升の兵糧米徴収の権利を獲得し、また各国を知行する国地頭の設置を承認させたといわれている。「五畿・山陰、山陽・南海・西海諸国を賜い、庄公を論ぜず兵糧段別五升を宛て催すべし、常に兵糧の催しにあらず、惣じてもって田地を知行すべしと

云々」『玉葉』文治元年十一月二十八日条 原漢文。しかし、頼朝による急な召喚命令によって時政は京を離れる。頼朝が時政の京都における施政に不満を抱いて召喚し、以後政治の正面に出るチャンスは一切与えなかったとも考えられる（大山一九八二、野口二〇一二）。

『玉葉』文治二年三月二十四日条には、京都を離れることになった時政が右大臣九条兼実の家司である季長に対して籍を進上し、馬を贈ったことが書かれている。「件の男また籍を進らせ季長朝臣に與ふ。・・・又馬二疋を進らす」。籍とは名簿（みづが）を意味し、馬の贈与と併せて時政が私的に兼実に臣従を申し出たと解することができる（落合二〇一四）。これは官位推薦を一元化して御家人を統制しようとした源頼朝にとって、重大な違反行為とも読める。時政の急遽召喚にはそうした事情もあったかもしれない。なお、時政は京を離れるにあたって一族の北条時定を代官として残したが、『鏡』によれば同年九月、頼朝は院宣を奉じる形をとって最勝寺領越前国大蔵（地頭は北条時政）の代官北条時定等による横領を停止している。時政にとっては手厳しい措置であった。

頼朝在世中の時政の地位が不安定であった証左をいくつか加えよう。頼朝は自らが知行主となった国々に、受領の推薦を行っている。受領たるべきはまず源氏の門葉、そして准門葉であった。元暦元（一一八四）年の推薦では、弟の範頼を三河守、太田広綱（撰津源氏）を駿河守、平賀義信（信濃源氏）を武蔵守に推薦している。文治元（一一八五）年の推薦では、山名義範、大内惟義、足利義兼、加賀美遠光、安田義資らを推薦し、弟義経の伊予守とあわせてすべて任官している。みな源氏門葉であった。

准門葉とされ、源氏一門外だが頼朝の推挙によって受領となっているのは、大江広元、毛呂季光、下河辺行平、結城朝光である。北条時政は門葉でもなく、准門葉の扱いも受けていない。よって頼朝在世中、官位官職を得ることはなかった。

歳首塙飯（おうばん）という儀式がある。正月に鎌倉殿である頼朝に

豪華な食事を献じる儀式であり、歳首塙飯を沙汰することは大変名誉なこととされた。塙飯沙汰人は門葉や有力御家人の中から鎌倉殿によって指名される。これは、頼朝の方から、正月に御家人の屋敷を訪れて接待を受ける「御行始め」とともに有力御家人の名誉であったが、頼朝在世中この名誉に預かったのは、安達盛長、足利義兼、比企能員、三浦義澄、千葉常胤、小山朝政などであり、北条時政の名は出てこない。興味深いことに、年末十二月の塙飯は『鏡』に記録がある。「建久二年十二月大一日乙亥 北條殿盃酒塙飯を献ぜ被る、同じき室家御前に参り給ふ」とある。十二月の塙飯は歳首塙飯と比べれば重要度が低いであろう。「鎌倉殿舅」とは准門葉でもなく、歳首塙飯を行う有力御家人と同列でもない。ひょっとするとその一段下なのかもしれない。

頼朝が造営した大倉の將軍御所の外周には、信頼する御家人たちの屋敷が配置された。当該御家人の名誉は言うまでもない。南には下野都宮の八田知家、武蔵の畠山重忠。東は頼朝乳母で流人時代に援助を惜しまなかった比企尼の一族比企朝宗。西には三浦義澄という配置である。

北条時政の屋敷はどこかと言えば、頼朝の大倉御所から山を隔てた名越にあった。

さらに注目すべきは、政子が長男頼家を出産するために御所を出たとき、その行先は父時政の名越邸でもなければ、弟義時の屋敷でもなく、比企尼の養子比企能員の屋敷であった。

有名な「曾我兄弟の仇討ち」からも頼朝と時政の複雑な関係を垣間見ることができ。

安元二（一一七六）年父を工藤祐経配下に暗殺された河津三郎祐泰の遺児は長じて曾我十郎祐成と五郎時致となり、建久四（一一九三）年源頼朝が主宰した富士の裾野の巻狩の場に侵入し、見事仇である工藤祐経を討ち果たす。兄十郎はその場で討たれたが、弟五郎はさらに頼朝宿館に侵入して捕縛され、その後処刑された。

この仇討ちについては、さまざまな解釈があり疑問も多い。ただ曾我



五郎時致の烏帽子親が北条時政であり、日ごろから時政は兄弟を支援していたこと。仇討ちを果たしたのち五郎時致は頼朝の寝所に進んでいること。当時駿河の守護は北条時政であったこと、などから事件の黒幕に北条時政を想定し頼朝暗殺を企んだとする考えもある（三浦一九一五）。だがこの事件の後、頼朝は弟範頼を肅清するなど果敢な人事措置を下しており、舅とはいえ時政に謀反の嫌疑があれば何らかの処断があったはずである。では時政は潔白か。真相は藪の中である。ここでは、頼朝と時政の間の冷たい微妙な関係の例として挙げておこう。

#### 四 源頼朝と義時

治承四年十月鎌倉に本拠を構えた頼朝は、舅時政を敬して遠ざけ、むしろ時政次男の義時を取り込もうと図った。時政は重要な役職に就くこともなく、対義仲や対平氏戦に登用されることもない。その一方で義時は頼朝側近の一人としての実績が伝わっている。

『鏡』によれば治承五（一一八一）年四月、頼朝は身近に仕える若手武士十一名を選んだ。そこには義時の名もあった。

「治承五年四月大七日壬子、御家人等の中、殊に弓箭に達する之者、亦、御隔心無き之輩を撰び、毎夜御寢所之近邊于候す可き之由、定め被ると云々。江間四郎、下河邊庄司行平・・・」これは、頼朝が有力御家人の子弟を自らの身辺に集め、側近として育て用いたと考えられている。「江間四郎」義時もその一人である。頼朝は、北条氏の内部に楔を打とうとしたのであろうか。

次は、寿永元（一一八二）年十一月の「亀の前事件」である。頼朝はすでに伊豆時代から良橋太郎入道の娘 亀の前を寵愛していた。政子が長男頼家を出産する前後、小坪の小中太光家の家から亀の前を伏見冠者広綱の家に移し、逢瀬を重ねた。それを時政妻の牧の方が政子に告げる。怒った政子は牧三郎宗親に命じて広綱の家を破却させ恥辱を与えた。広綱は亀の前とともに鎧摺に逃げた。この知らせを受けた頼朝は宗親を伴っ

て鎧摺に行き、宗親を難詰した上でその髻を切る。宗親は北条時政妻の牧の方の父（『鏡』では兄、『愚管抄』では父）であったから、時政は頼朝の所業に怒り伊豆へ退転してしまう。事態の波紋に頼朝は驚くが、側近を派遣して義時の動静を確認、義時が鎌倉に残っていると知り、義時を賞賛する。注目すべきは、伊豆に退転した時政に対して義時が同調していないという事実である。冷静であるといえはそれまでだが、父時政とは別の政治的立場を取ろうとする醒めた義時の像が見えてくる。

なぜ義時が時政に対して「醒め」なければならなかったか。それには北条家の嫡子問題があった。北条時政の嫡子は長子の宗時であったらしい。しかし、治承四（一一八〇）年石橋山の敗戦後、宗時は戦死してしまう。義時は次男である。時政家督は義時に移るのが自然だが、時政は長く嫡子の座を空けたままとしている。実際『鏡』において義時は、多く「江間」姓で表記される。そして北条氏の家督は文治五（一一八九）年に正妻牧の方との間に生まれた嫡子政範とされた。さらに政範が元久元（一二〇四）年死去すると時政は嫡子候補として、義時の子名越朝時を想定したとも言われる（長又二〇一五）。時政は義時を忌避したのである。

いわゆる源平合戦において北条時政は出陣を命じられず活躍の機会を得ない。その一方で小四郎義時は源範頼の軍に従って西国に遠征している（『鏡』元暦二年二月一日条）。

後年、義時の嫡男金剛が元服する時、頼朝は烏帽子親になり偏諱を与えて「頼時」と名乗らせたうえに、三浦氏との婚約も命じている（『鏡』建久五年二月二日条）。頼朝が時政とは異なり義時を重視した証左とも読み取れる。この頼時が、後の三代執権北条泰時である。

#### 五 頼家という存在

これまで、頼朝在世中北条時政が頼朝によって厚遇されていなかったこと、頼朝は時政次男の義時を重用する傾向があったことなどを見てき

た。しかし、冷遇しつつも頼朝は時政を抹殺しなかった。それにはやはり理由がある。時政には特筆すべき能力や実績があった。まず、挙兵当初甲斐源氏を味方に引き入れた外交能力、さらに、文治上洛に際して当初軽視していた貴族をして高い評価を下させた行政能力がある。だがこれだけではない。決定的なのは、頼朝と時政が共通の利害を持ったことである。すなわち、頼朝の嫡子頼家を盛り立てて無事後継者とするのである。

頼朝在世中の一門肅清は義経だけでなく、異母弟範頼や甲斐源氏諸将等に及んでいる。頼朝から見て、頼家の安泰はどこにいても絶対的なものでなく、一門で頼家の地位を脅かす存在は容赦なく滅ぼしたのである。

遑って、時政を京都守護のために派遣した文治元年を考えてみよう。頼朝と時政の関係が冷淡であるにも拘らず、この時なぜ時政を京都に派遣したのだろうか。頼家をキーパーソンとして考えると答えが出てくる。

寿永元（一一八二）年八月に生まれた頼家は頼朝嫡子である。しかし、鎌倉殿後継と定まったわけではない。最大のライバルは義経である。治承四年奥州から駆け付けた義経を頼朝は自らの養子とし（元木二〇一四）、秩父平氏の有力者川越重頼の娘を妻に与えた。その後の華々しい戦功もあって義経は御家人間に無視できない勢力を持った。正嫡である頼家を後継者として御家人間や京都朝廷に認めさせたい頼朝と、外孫である頼家を頼朝後継者に位置付けたい時政の利害は一致していた。時政が京都に派遣されたのは、義経が反頼朝挙兵に失敗して逃亡した直後であった。時政にとって、義経勢力の徹底的打倒を図り頼家の地位を確立することが最大の使命だったと言えよう。俗に守護地頭の設置として知られる文治五年の勅許は、実態として義経打倒のため西国に国地頭を置き、荘公を問わず反別五升の兵糧米を徴収する権利を得たものである。しかし、時政の京都滞在は短期で終わり鎌倉に召喚される。文治の勅許は義経勢

力根絶を図る頼朝の意向に十分応えたものであり、それ以上の活動は不要ということであろうか。

ここで一つ注視しておきたい逸話がある。時政が頼家の地位を確保するのに力を入れていたのに対して、政子は必ずしも同じ思いでなかったようである。『鏡』建久四（一一九三）年五月十六日条で、富士の裾野の巻狩において十二歳の頼家が鹿を射止めた。喜んだ頼朝は狩を中断して「矢口祭」を行って山神に感謝し、鎌倉の政子にも急使を派遣した。ところが政子は頼朝の行動を大げさであるとして冷淡に対応し使者は面目を失った。頼朝は頼家を後継者として御家人たちに認めさせたいため、大仰なほどの対応をしたが、政子にはこの意味が解らなかったと通常は言われている。しかしひょっとすると、比企邸で生まれ比企一族や比企尼の係累が乳母、乳母父を務める頼家から政子の心は離れ、この前年に生まれ妹阿波局が乳母となった実朝の方が親しい存在に見えていたのかもしれない。

#### 六 鎌倉殿頼家と北条時政

建久十（一一九九）年一月、頼朝が死去した。十八歳の頼家は右近衛中将に任命され、頼朝の後継者に任ぜられた。鎌倉では吉書始を行って新政権がスタートした。頼家時代の政治については『鏡』が北条氏の立場から書かれているため、ことさら頼家の悪政を描き、時政との衝突を述べる。まずこの歪みを是正した上で、頼家と時政の関係を考えたい。

頼家が鎌倉殿として訴訟を専断するにあたり乱暴な判断が多かったため、十三人の有力御家人の合議制が導入され、頼家の専断は停止された、と言われる。しかし、頼家の裁決は『鏡』上でこの後も存在し続けている。また、二月六日に吉書始で四月十二日に専断停止というのは、悪政理由なら早すぎる。実際には、問注所の御所からの移転と拡充、政所の整備などと連動して、最終決裁を頼家に仰ぐ前に訴訟取次を十三人に限る、もしくは合議を経た上で頼家が決裁するという仕組みではないかと

考えられている（藤本二〇一四）。

正治二（一一二〇）年五月陸奥国新熊野社領の境相論では現地の絵図に線を引いて、所領の広狭は運不運、今後現地で実検する必要はないと決裁したことも頼家の「悪政」の例として有名である。ところが、その後起こった相論で頼家が現地に実検のために側近を派遣している記事もあり（同年十二月三日条）、一連の頼家悪政記述の信憑性を疑わせるものとなっている。なお頼家が時政を忌避した根拠として建久十年三月、伊勢神宮の所領六ヶ所の地頭職を停止した中に時政領遠江蒲御厨が含まれていたことを挙げる向きがある（奥富一九八三）が、祈禱目的や本所領家に配慮した地頭職の停止は頼朝時代から少なくないのであり（藤本二〇一四）、頼家・時政不仲の根拠にはなり得ない。

先入観を抜きにして北条時政関連の記事を追ってみる。頼家が鎌倉殿となった翌正治二年正月元旦の歳首壇飯は、まさに北条時政が務めている。そして同年四月時政は源氏門葉、准門葉以外で初めて叙爵し受領となっている。従五位下遠江守である。『鏡』によれば、同年十二月に頼家は源平合戦以降五百町を超える所領を得た御家人は超過分を収公し無足の近侍らに与えるべきを命じている記事がある。結果的にこの施策は実現しなかったが、この時期の頼家が自分の考えで政務を裁決している証左と言える。四月の専断停止が実のないものであった以上、時政の壇飯も叙爵も頼家の意思であったとみてよい。頼家が義経や頼範といったライバルを退けて頼朝の後継者になるに際して、時政が果たした役割をよく理解し、評価した結果であると言えるよう。

## 七 時政像の再構築に向けて

正治元（一一九九）年十月から梶原景時の失脚に繋がる一連の事件が始まる。ここでは、頼朝以来將軍権力の柱石であった梶原景時が失脚し、結果として北条氏の権力上昇が容易となった。景時の讒言で窮地に陥った小山朝政が三浦義村らと語らい御家人六十六人連名で景時を弾劾し、

景時は失脚、一族が滅ぼされた事件である。これまでは、事件当初小山に景時讒言を伝えた阿波局が北条時政の娘であることから、時政が事件の陰にあると考えられてきた。しかし、阿波局は実朝の乳母、政子の妹であるが、母は牧の方ではない。つまり政子・義時に近い。

下って建仁三（一二〇三）年北条氏が二代將軍頼家を廢して実朝を擁立するときのこと、九月十日新將軍擁立を決めた北条義時らは実朝を母政子の御所から名越の時政邸に移す。しかし、五日後の九月十五日阿波局が、名越邸において牧の方の様子を見ると実朝を害しようとする気配がみられると告げ、義時がすぐに実朝を政子の下にもどした。時政はこれを見て周章するばかりだったと『鏡』にある。このような行動をとる阿波局が梶原事件のとき、本当に父時政の意思で動いたのだろうか。むしろ阿波局を動かしたのは義時や政子ではなかったか。

この後、比企能員とその一族の滅亡、將軍頼家の出家隠棲と実朝の擁立、畠山重忠一族の滅亡が続く、最後には時政自身が義時らによって引退させられ政治の実権は実朝・政子・義時に移っていく。鎌倉殿となった頼家は、当初時政を敵視していたとは思えないと述べた。しかし、建仁三（一二〇三）年九月の比企一族滅亡と頼家への出家強要は、確かに北条氏の主導による。この間の詳細を述べる紙数はないが、ここで言う北条氏の実態を考える上で以下の点を指摘しておきたい。

頼家妻、若狭局の父である比企能員を危険視したのは時政よりも政子であること（永井二〇〇〇）。比企一族には有力な御家人人脈があったが、安達景盛が頼家と疎遠になって政子に接近しその一角が崩れたこと（長又二〇一三）。建仁三年九月、比企能員を名越邸で殺害する前後の『鏡』の記述では、時政が涙したりためらったりする一方で、所要所に義時・政子が登場して事を進めていること。すなわち、比企能員の「陰謀」を時政に告げたのも、一幡（頼家と比企氏の子）がいる小御所への攻撃を命じたのも政子であり、小御所攻撃軍の大將は義時であったことなどである。比企打倒の主体は義時・政子であったと言える。

今回の論考はここまでとするが、時政と頼朝、時政と義時・政子の関係を精査することで、建仁三年以降における時政の役割についても新しい展望が開けてくるものと思われる。

## 引用文献

- 奥富敬之『鎌倉北条一族』 新人物往来社 一九八三年  
五味文彦『吾妻鏡の方法 事実と神話に見る中世』 吉川弘文館 一九九〇年  
坂井孝一『曾我物語の史実と虚構』 吉川弘文館 二〇〇〇年  
永井 晋『鎌倉幕府の転換点『吾妻鏡』をよみなおす』 NHKブックス 二〇〇〇年  
○年  
関 幸彦『北条時政と北条政子』 山川出版社 二〇〇九年  
池谷初恵『鎌倉幕府草創の地 伊豆韭山の中世遺跡群』 新泉社 二〇一〇年  
細川重男『北条氏と鎌倉幕府』 講談社 二〇一一年  
三浦周行『曾我兄弟と北条時政』 『歴史と人物』 東亜堂書房、一九一五年  
大山喬平『文治の国地頭をめぐる源頼朝と北条時政の相剋』 (京都大学文学部研究紀要二二 一九八二年)  
杉橋隆夫『北条時政の出身―北条時定・源頼朝との確執』 (立命館文学 五〇 〇 一九八七年)  
森 幸夫『伊豆守吉田経房と在庁官人北条時政』 (季刊ぐんしよ 3 (2) 一九九〇年)  
杉橋隆夫『牧の方の出身と政治的位置―池禪尼と頼朝と』 上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』 思文閣 一九九四年  
菊池紳一『北条氏系図考証』 時政以前 『吾妻鏡人名総覧』 安田元久編 吉川弘文館 一九九八年 所収  
野口 実『『京武者』の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に』 (京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 一九 二〇〇六年)  
野口 実『伊豆北条氏の周辺』 (京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要二〇 二〇〇七年)

坂井孝一『真名本『曾我物語』の構想と特徴』 (創価人間学論集三 二〇一〇年)  
野口 実『北条時政の上洛』 (京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要二五 二〇一二年)

長又高夫『鎌倉北条氏列伝 (一) 北条時政』 (身延山大学東洋文化研究所所報 一七 二〇一三年)

落合義明『北条時政と牧の方―豆駿の豪傑、源頼朝からの自立』 野口実編『治承』 (文治の内乱と鎌倉幕府の成立) 清文堂 二〇一四年

元木泰雄『源頼朝 天下草創の光と影』 野口実編 前掲書

藤本頼人『源頼朝 「暗君像の打破」 野口実編 前掲書

長又高夫『鎌倉北条氏列伝 (二) 北条泰時』 (身延山大学東洋文化研究所所報 一九 二〇一五年)

『延慶本平家物語』 北原保雄他編 勉誠出版 一九九九年

『新訂増補国史大系吾妻鏡』 前編 吉川弘文館 一九六四年

『真名本曾我物語』 1 平凡社 一九八七年

『吉口伝』 統群書類従 卷三二〇 統群書類従完成会 一九五七年

『玉葉』 國書双書刊行会編 名著刊行会 一九八八年

(二〇一七年九月一日受稿)





## A Study on Hojo Tokimasa: Through His Relationship with Minamoto Yoritomo and with Other Hojos, Yoshitoki and Masako

Masayasu Otake

Department of Education, Kamakura Women's University

### Abstract

Hojo Tokimasa was one of the warriors who contributed to the foundation of the Kamakura Shogunate. After Minamoto Yoritomo died, Tokimasa forced Yoritomo's son, Yoriie, to retire from the position, after which Tokimasa gained substantial power.

Studies on the formation of the Kamakura Shogunate have progressed since the 1980s. To date, it has been thought that the Hojo clan cooperated to expand power. However, a new perspective on the politics of the early Kamakura period was most likely assumed when Tokimasa's intention and behavior was distinguished from that of Yoshitoki and Masako. It is now time to reevaluate Tokimasa.

Key words: words: the Kamakura Shogunate, Hojo Tokimasa, Minamoto Yoritomo, Hojo Yoshitoki, Hojo Masako